

超未熟児における身体発育と栄養摂取量

(分担研究：新生児・乳児の栄養管理に関する研究)

研究協力者 中 村 肇

要 約：正常に発達した超未熟児においても生後の身体発育及び栄養摂取量には大きな幅があるが、生後2～3週の栄養摂取量が後の発育に影響している可能性が示唆された。

見出し語：超未熟児・身体発育・栄養摂取量

研究方法：1989年以降に神戸大学母子センターに入院した超未熟児のうち、修正1歳の時点で後遺症なく発育している9例を対象とし、修正6ヵ月で体重が10パーセンタイルに達していない5例（I群）と達している4例（II群）に分け、それぞれの臨床像、体重・身長・頭囲の発育曲線及び毎日のカロリー摂取量について比較した。

考 案：後遺症なく発育している超未熟児においても生後の身体発育、栄養摂取量には大きな幅があり、今後は正常に発育した超未熟児について1例ずつ身体発育と栄養摂取量について検討し、低栄養に伴う中枢神経後遺症を避けるためどの時期に最低限どの程度の栄養摂取を必要とするかを見い出さなければならない。

結 果：II群においては生後2～3週の蛋白質、Ca、カロリー摂取量がI群に比して多かった（図1）。II群の中においても生後早期の栄養摂取量が少ない症例があり、逆にI群においても生後早期に十分な栄養が摂取されている症例が見られた。頭囲の10パーセンタイルのcatch upは体重・身長に比して早く（図2）、また頭囲は栄養摂取状態を鋭敏に反映していた。

図1

新生児早期の栄養摂取量

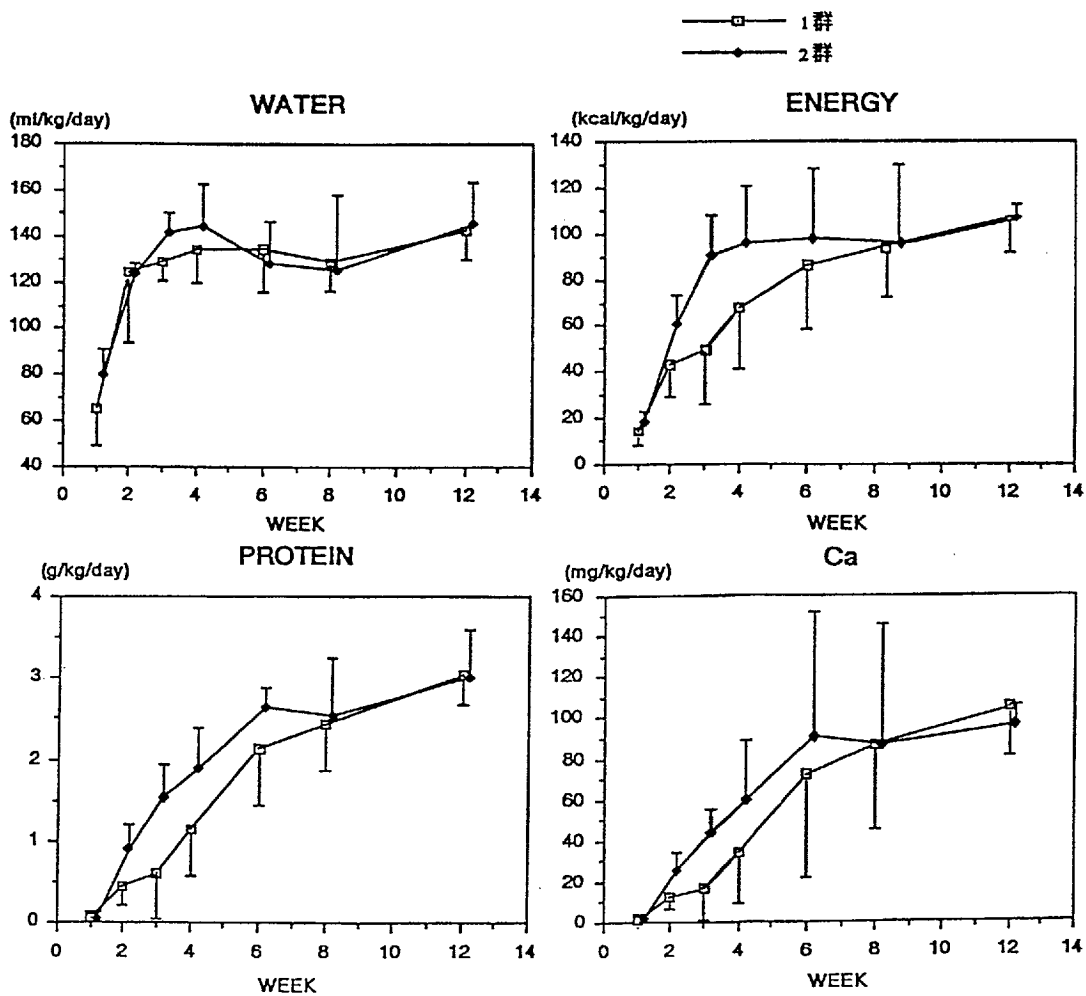
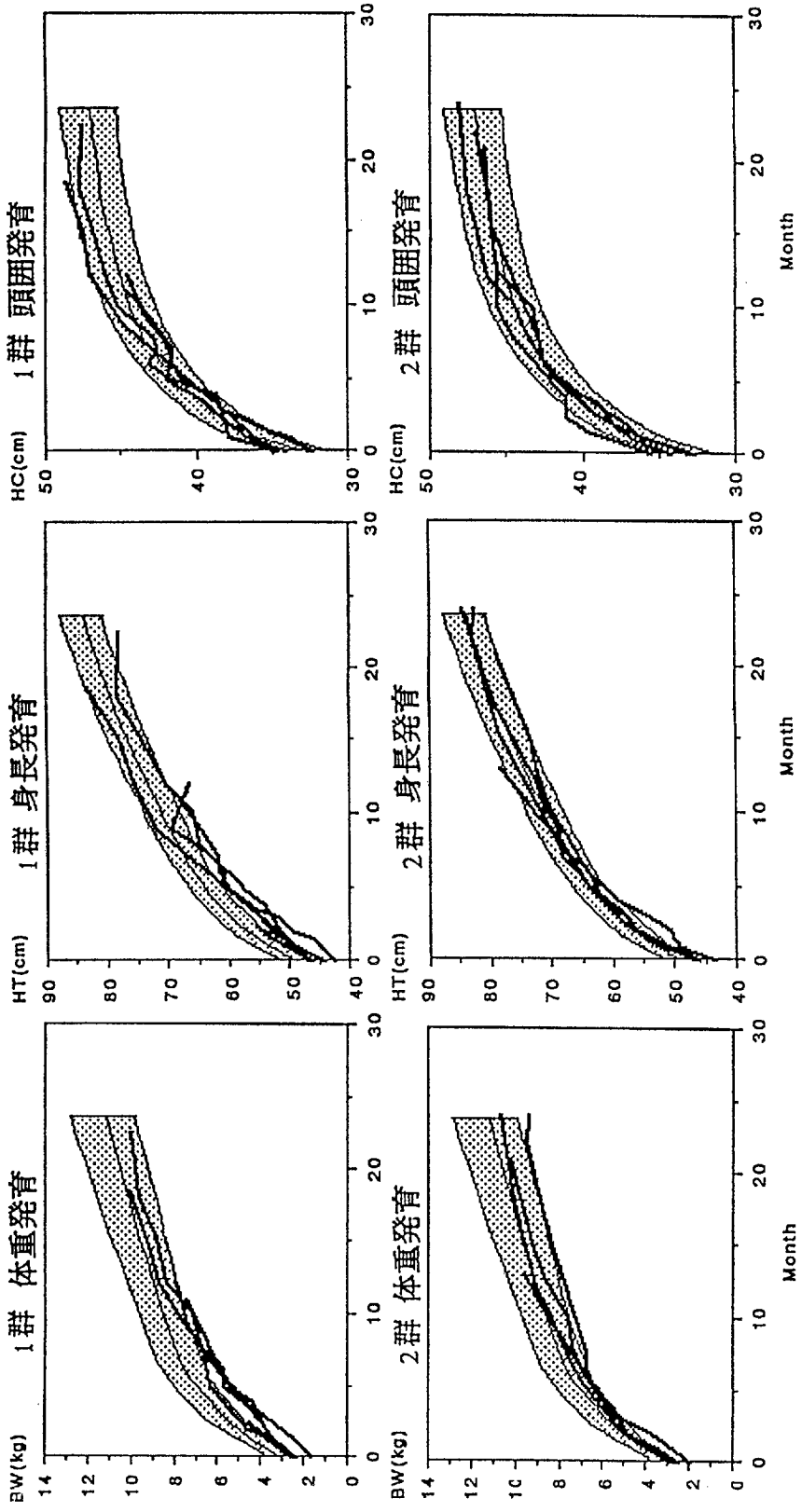


図2

修正月齢による身体発育





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:正常に発達した超未熟児においても生後の身体発育及び栄養摂取量には大きな幅があるが、生後2~3週の栄養摂取量が後の発育に影響している可能性が示唆された。